豚増殖性腸炎の発生事例

南丹家畜保健衛生所

○櫻田孝之　岩間仁志

【発生状況】管内でこれまで発生が確認されていなかった豚増殖性腸炎（PPE）が2農場において発生。母豚665頭を飼養する府内最大規模一貫経営のA農場で5月に、母豚16頭を飼養する小規模一貫経営のB農場で9月に、それぞれ離乳子豚の下痢が散発し、当所に病性鑑定依頼。【病性鑑定】両事例とも剖検でPPEの特徴的所見である腸管粘膜の増殖性病変を確認。病理組織検査で病変部にスピロヘータ様菌体を多数認め、PCR検査で糞便（A農場）、病変部（B農場）から *Lawsonia intracellularis*（*L.i*）の特異遺伝子を検出したため、PPEと診断。特にB農場の事例は症状の激しさからPPEの中でも急性型の増殖性出血性腸炎と診断。【保菌状況調査】発生農場における飼養豚の保菌状況を把握するため、糞便を用いてPCR検査を実施。A農場では母豚55頭、子豚35頭及び肥育豚10頭、B農場では母豚15頭を検査し、A農場の特定の離乳舎の子豚5頭及び肥育豚2頭で *L.i* の特異的遺伝子を検出。さらに、管内の一貫経営C農場及びD農場についても同様に検査を実施したが、*L.i* の特異的遺伝子は検出されなかった。【対策】今回の事例では、母豚群で排菌が認められなかったことから、母豚からの感染ではなく、離乳舎への移動後に子豚間で感染が起こったものと推察。豚房の糞便除去、空舎時の洗浄・消毒の徹底と離乳舎への移動時の抗菌性剤投与を指導。以降、両農場とも続発はない。